

安部公房初期作品にみる帝国軍人イメージの変遷

解 放

戦後の日本文学を代表する作家の一人に安部公房が挙げられる。彼は生後間もなく満洲に渡り、外地で終戦を迎えた後の 1946 年に日本へと引揚げてきた。この引揚げ者としての経歴を持つ安部が執筆した初期の作品には、引揚げ体験の痕跡が多く見られる。しかし、その初期作品を対象とする先行研究には、テキストに反映されている安部の引揚げに関する記憶を論じたものは僅かしかない。とりわけ、安部の初期作品に登場する、在留邦人の一部である「復員者」という軍人の存在について注目した研究は、さらに少ないのが現状である。

本発表では、戦争中の軍人をテーマとする安部の作品を対象に、その初期テキストに描かれている軍人のイメージ変遷を考察する。例えば、『壁あつき部屋』（1953）では B C 級戦犯が主人公として設定され、『変形の記録』（1954）のプロットは関東軍を中心に展開し、『夢の兵士』（1957）には脱走兵がストーリーを貫く重要な存在として登場する。本研究では、上記の作品に登場する軍人を語る際の語り手の変化に焦点をあて、この語り手が帝国の軍人を、加害者と被害者の間で揺らぎながら語っているプロセスに、改めて焦点を当てて読み解いて行く。こうした考察を通して、引揚げ作家である安部公房の戦後認識の変化を再確認し、戦後の幾多の課題に新しい視点を呈示できるのではないかと考える。

発表者は、博士論文（『安部公房における引揚げと検閲』東京外国語大学 2021）において、「引揚げ」という記憶が如何に安部へ影響を及ぼしてきたかを明らかにした。しかし、この論文は、「引揚げ」について論じたものの、それは「在留一般邦人」に焦点をあてたもので、「復員者」に対する考察が十分であるとは言えないものであった。本研究では、安部の初期作品に登場する軍人のイメージを再考することによって、「引揚げ」に関する安部の認識を、より明晰に把握できるのではないかと予測している。

安部公房初期作品にみる帝国軍人イメージの変遷

解 放

キーワード：安部公房、『変形の記録』、『夢の兵士』、軍人

はじめに

安部公房は生後間もなく満洲に渡り、外地で終戦を迎えた後の 1946 年に日本へと引揚げてきた。その初期作品には引揚げ体験の痕跡が多く見られるが、このような作品を対象とする先行研究には、安部の引揚げを論じたものは僅かしかない。また、こうした研究は、現在普遍的に認識されている引揚げ者、すなわち「在留一般邦人」に焦点をあてたもので、広義に引揚げ者の一部とも言われている復員した兵士という軍人の存在に対する考察が十分であるとは言えないものであった。

本論文では、安部の初期作品に描かれている軍人のイメージ変遷を考察し、その軍人のイメージを再考することによって、「引揚げ」に関する安部の認識をより明晰に把握できるのではないかと予測している。この論文では、作品に登場する軍人を語る際の語り手の変化に焦点をあて、この語り手が帝国の軍人を、加害者と被害者の間で揺らぎながら語っているプロセスに、改めて焦点を当てて読み解いて行く。こうした考察を通して、引揚げ作家である安部公房の戦後認識の変化を検討し、戦後の幾多の課題に新しい視点を呈示できるのではないかと考える。

一、安部公房と（内地/外地）の軍人

帝国の軍人に着目した作家は数多くいた。高杉一郎『極光のかげに』（1950）のようなシベリア抑留を主に描くものや、野間宏『真空地帯』（1952）のような軍隊内部に注目したものが挙げられる。留意すべきは、アヴァンギャルド作家とされている安部公房も、軍人に言及した作品を出版している。しかし、安部は軍人を二種類に分けて認識していたように思われる。外地に送られ、本土から始終周縁化されている軍人に関して、安部は嫌悪を抱きながら、その加害者的側面を強調していたと考えられる。例えば、安部には軍人に関して、「ソ連軍がとくにひどい事したっていうのは嘘ね。一番残酷な仕打ちをしたのは日本人どうし。[...] 何といったって怖かったのは日本人の強盗だよ。兵隊くずれのね」¹や「ぼくはずいぶん長く奉天にいたんですが、いちばんぼくらが被害を受けて怖かったのは日本人の強盗なんです。それはほとんど憲兵ですね」²のような記述が散見されている。ソ連軍の暴行は改めて強調する必要もないが、安部はここでソ連軍の暴行が如何に残酷であった

¹ 安部公房「無思想の逃亡者と実存的共和国」『映画芸術』第 16 巻第 2 号、1968 年 2 月（『安部公房全集 22』新潮社、1999 年 7 月、p.11）

² 安部公房「方舟は発進せず」『安部公房 方舟は発進せず』ミネルバ放送批評会刊、1985 年 1 月 30 日（『安部公房全集 28』新潮社、2000 年 10 月、p.47）

かよりも、日本人憲兵を「強盗」とみなし、この「強盗」となった元日本軍兵士の加害者の行為を告白している。

引用から察するように、安部にとって、満洲に駐在した日本軍兵士はソ連軍を超える加害者的存在であった。言い換えれば、引揚げることができなかった外地の軍人に関して、安部は否定的な眼差しを注いでいる。しかし、内地にいる軍人、強いては外地から引揚げてきた軍人に対して、安部は異なる一面を呈示している。例えば、安部は 1953 年 2 月に巢鴨プリズンに拘置されている BC 級戦犯と面会し、その面会内容をもとにしたルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』を同年 4 月に刊行した。このルポルタージュにおいて、安部は BC 級戦犯の境遇について「彼らは一様に自分たちこそ戦争によるギセイ者であると自覚した」と書き記している³。BC 級戦犯は不正の裁判を受け、冤罪になっていたことは事実であるが、全ての戦犯を被害者と称することは妥当であろうか。ここでは BC 級戦犯の是非に関して深く検討しないが、内地にいる軍人への安部の眼差しが、外地にいた軍人に対するものと明らかに異なっていることは注目に値する。つまり、安部は軍人たちの植民地での滞在歴と引揚げ状況を境界線として、彼らを被害者と加害者に分けて認識していたのかもしれない。次節から軍人を描いた安部の小説作品からその詳細を追及してみる。

二、植民地に閉じ込められた関東軍——『変形の記録』

『変形の記録』は『群像』1954 年 4 月号に掲載された安部の短編小説である。この作品は、終戦間際の満洲で敗走する関東軍を主に描き、とりわけ、テキストに登場する軍人がほぼ全て加害者とされている点は留意すべきである。その代表者が「津村中佐」という軍人である。「津村」は満洲の中国人を無差別に射殺するほか、同じ日本兵でさえ、それが上官であれ、部下であれ、自身の命令に従わない場合、躊躇なく殺害していた人物である。このような残酷な軍人のイメージは作品全体を貫き、語り手の下級兵士である「ぼく」も一見被害者のように見えるが、実は異なる側面を帯びていた。例えば、自身の死体を見ながら「自分の死体をいとおしく思い、すこし悲しくなった」と感じていた語り手だが、数十人の中国人の「死人」を見た後に「ゆううつ」な気分になったとしか語らなかった⁴。自身の死を悲しく嘆いている語り手は、原住民の惨状を自身の悲しい気持ちを思い起こさせる装置として受け止めていたのである。つまり、この作品に登場する全ての軍人においては、その加害者としてのイメージが浮き彫りにされていると言えるかもしれない。

さらに注目すべきは、外地にいる日本軍兵士が満洲という空間から逃れられない点である。例えば、「南少尉」によれば、部隊を乗せているトラックは「正確に直径百二十五キロの円周にそってまわっていた」ために、「九時間たって、夜が明けたころ、やつらはもう一

³ 安部公房「裏切られた戦争犯罪人」『改造』第 34 巻第 4 号、1953 年 4 月（『安部公房全集 3』新潮社、1997 年 10 月、pp.446-447）

⁴ 『変形の記録』と『夢の兵士』からの引用はそれぞれ『安部公房全集 4』（新潮社、1997 年 11 月）と『安部公房全集 7』（新潮社、1998 年 2 月）に拠る。

度この部落にぶつかって」しまうのである。満洲に居残る羽目となっていた登場人物が円環的な移動を強いられていることは、植民地空間からの離脱の不可能性を意味する同時に、外地における軍人が戦後において各地で抑留された惨状を示唆している。ただし、前述したように、安部は自身の経歴によって外地での日本軍兵士について嫌悪を抱いていたため、作品に描かれた軍隊の結末は、作者の同情というよりも、外地における軍人へのアイロニーであった可能性が高い。おそらく、兵士の〈帰郷〉が拒まれている背景には、原住民に対する引揚げ者の植民者としてのアイデンティティに関する安部の否定的な見方を見出せるかもしれない。ただし、同じ〈帰郷〉できなかった軍人でも、外地の軍人と比較すると、内地にいる軍人の語りは明らかに異なっている。次節から本土の軍人を描いた安部の『夢の兵士』を対象に考察してみる。

三、帰郷を拒まれた内地の軍人——『夢の兵士』

『夢の兵士』は1957年6月に出版された安部の短編小説で、戦時中の脱走兵を主に描いている。この小説をもとに、安部はテレビドラマ『日本の日蝕』(1959)と戯曲『巨人伝説』(1960)をそれぞれ創作した。この作品において、脱走兵自身の語りは現れず、全て他の登場人物によって語られている。ただし、テキストに登場する主な人物——老巡查、村長、助役と住職、は全て加害者として設定されていることは注目に値する。例えば、村長や助役が脱走兵を「非国民」と見做し、「半殺しにしてやるべえよ!」と語っているように、二人は他者を暴力的に排除する存在とされている。また、老巡查は脱走兵が自分の息子であるにもかかわらず、「わしに対する、つらあてだったんだべか……もうあんなやつ、息子だとは思わんわ」と語っている。巡查は自身のために息子を見殺し、徹底的な加害者だと言っても過言ではない。ただし、このような語りによって、脱走兵の被害者としてのイメージが読者の内面で固定されたかもしれない。つまり、この作品において、村内部の人間を加害者とし、外部の人間を被害者とする境界線が設置され、戦場に送られるはずの国家の兵器である軍人は結局被害者とされているように思われる。

このように『変形の記録』と『夢の兵士』では、故郷に帰れない軍人が登場する点において共通しているが、外地と内地の空間の差異によって、作家の眼差しが真逆になっている。安部にとって帝国の軍人は、その具体的な行為によって否定的に評価されるのではなく、むしろ、その活動空間が植民地——この場合特に満洲を指すが、で展開されるかどうかによって認識されている。『変形の記録』において、最も抑圧されている最下層の兵士の下に、植民地の原住民を登場させることによって、外地に留まっている軍人全体を加害者側に配置することに成功した。『夢の兵士』では、本土の兵士は脱走兵という弱者の身分を持ち、軍人と一般民衆という従来の権力構造ではなく、軍人の方が民衆に排除される〈異常〉な構造が示唆されている。このような差異の背景には、やはり安部の植民地体験や引揚げ体験の影響を見出せるかもしれない。

おわりに

本論文では、『変形の記録』と『夢の兵士』に描かれている日本軍兵士を対象に、帝国の軍人に関する安部の認識を考察した。『変形の記録』では、軍隊は中心から離れた場所で円環移動をしたため、常に周辺地帯に置かれていた。これは、本土日本に戻れなかった外地の軍人の状況を示唆していると思われる。ただし、満洲の空間に閉じ込められた軍人の帰郷できなかった結末には、軍人の加害者的行為への植民地空間の復讐という意味合いを孕んでいるかもしれない。『夢の兵士』では、村の中と外は予め構造化され、脱走兵が始終周縁化されていた点では、『変形の記録』と共通している。しかし、外地の軍人のイメージとは異なり、内地の軍人のイメージは他者の抑圧によって被害者とされていたのである。同じく帰郷できなかった結末を迎える二つの小説だが、植民地空間との関わりや引揚げの結果によって、テキストから呈示される軍人のイメージは明らかに異なっている。その背景に、植民地や引揚げに関する安部の認識が深く関わっていたと考えられる。